

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	平成30年度第2回高松市創造都市推進審議会
開催日時	平成31年2月19日(火) 13:00~14:45
開催場所	高松市防災合同庁舎 301会議室
議 題	(1) 第2次高松市創造都市推進ビジョンにおける取組について (2) 今後の予定について
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	佐々木会長、中副会長、西成委員、大久保委員、木村委員、中西委員、藤田委員、平野委員、橋本委員、原委員、篠田委員、西村委員
事務局	佐々木創造都市推進局長、長井創造都市推進局参事、田井経済産業部長、一原文化・観光・スポーツ部長、西岡産業振興課長、十河農林水産課長補佐、吉峰観光エリア振興室長、堀内都市交流室長補佐、川畑文化財課長補佐、前場スポーツ振興課スポーツイベント誘致係長、合田美術館美術課長、佐野産業振興課長補佐、三浦産業振興課創造産業係長、松下産業振興課創造産業係主事
傍聴者	0 人    (定員 10 人)
担当課及び連絡先	産業振興課 創造産業係 839-2411

審議経過及び審議結果

- 1 開会
- 2 市長挨拶及び事務局体制の紹介
- 3 会長選任等について

(出席委員による自己紹介)

橋本委員が佐々木委員を会長に推薦し、他の委員も承認。

【会長】

御推薦いただき感謝申しあげる。他の委員の方が言われたように、私も本審議会は7年目になる。様々な思いが巡るわけだが、なんといっても、この「創造都市推進局」といった横断的な体制をとっていただき、この審議会で着実に議論していく、という流れが軌道に乗ってきたことを改めて感じてい

## 審議経過及び審議結果

るところである。加えて、この会議と関連した機関である「U40」という高松市の若い方が実際に行動する、という二段構えになっている。この審議会では、全体の状況を見ながら評価をしたり、方向を決める。そして実戦部隊として高松市の若い人たちがいるということは、とても上手く回っている仕組みではないかと改めて思う。

先ほど、市長からお話もあったように、瀬戸内国際芸術祭が、いよいよ世界的に評価をされてきており、また、2020年の東京オリンピック・パラリンピックが間近に迫ってきており、ややもすれば東京に更なる一極集中が起きる恐れもある。その中で、文化芸術がこの地域の魅力をアップしており、高松の場合には、逆に、そのチャンスを生かしてその流れに抗うというか、四国のリーダー役を果たしていく、というポジションにあると思う。是非、皆様方におかれまして、積極的な御意見をいただき、良い成果になるようにしていきたいと思う。今期もよろしく願いしたい。

佐々木会長が中委員を副会長に指名。

### 【副会長】

私も第1期から参加させていただいて、U40の活動を見ても一歩ずつでも前に進んでいると感じている。今期の第4期も、前期より更にもう一歩前に進めるような審議会が出来るようにしたい。少しでもそのサポートをしたいと思うので、どうぞ皆さんよろしくお願い申しあげる。

### 4 議題（1）第2次高松市創造都市推進ビジョンにおける取組について （事務局から配付資料について説明）

### 【委員】

今の説明に対する意見というよりは、感想みたいなものだが、先日、U40の事業報告会に私も参加させていただいた。かなり参加者も多く、市民にとっても関心の高い報告会ではないかと思った。もちろんU40関係者が中心になっていたのも、私も卒業生なのである意味、同窓会のようなになり、すごく良い雰囲気であった。私も現役のU40とつながることができ、今までになかったつながりであった。人がどんどん入れ替わっているが、つながりはずっと残っている。第1期・第2期はああいった雰囲気はなかったので、そういった意味ではU40という事業が一つ風穴を開けて、これまでつながりがなかったような人材をつなげる場づくりを今でも継続していただいているということは、私としても非常に有難い場所を作っていただいたと思う。今後、どんどん成長していくと思うので、本当に、これは素晴らしいつながりになるのではないかと感じた。

4つの事業についての御説明についても、予算をもらいながらもしっかりと成果を出すというような切り替えを第3期にしたようなので、これまでのU40のやり方とは異なると思うが、それぞれに充実した内容で、これまでになかった動きということで非常に評価できるのではないかと思うのと同時に、私自身も頑張らないといけないと思った。感想という形ではあるが、以上である。

【会長】

U40という取組が定着したということ、予算がついて成果もあげてと、良いサイクルが出てきたという話が出てきたが、これは高松の創造都市にとって大事な仕事である。

【委員】

「たかまつ工芸ウィーク」については、大変面白い取組をされており、産業というか地元の商店の方も参画されているだろうし、大変楽しい催しである。「食プロジェクト」でも、「たかまつ食と農のフェスタ」などは、非常に市民が身近に参加できる良い機会だと思う。一つ申しあげると、我々の方にも問題があるが、せっかく市が色々取り組んでいただいているが、もう一つ、現場とキャッチボールが十分できていないのではないかと。現場の声を吸い上げて、それを市が答えを返していくキャッチボールを、もう少し活発にできればと思っている。

【委員】

何期か前に、U40よりももっと下の若い世代の人たちからの意見も必要なのではないかという発言が出たと思うが、工芸や民芸など伝統工芸ももっと子どもの時代からプロジェクトに入れてはどうか。また、プロジェクトも色々主な取組があるが、第4期にもなると、実績として予算やかかった金額、プロジェクトの成果的な人数などを具体的に出すことは、市民目線としても望まれることではないか。

【事務局】

「たかまつ工芸ウィーク」の現場と行政とのキャッチボールという点でございますが、本事業につきましては、本市も含め、関係団体の皆様に参加いただく実行委員会の形式をとっておりまして、その際に色々御意見をいただいた上で、事業に反映していき、継続して協力してまいりたいと我々も思っているところでございます。また、事業に関する成果につきましては、次回の会議において、今年度である平成30年度の実績報告を議題として開催させていただき予定でございます。その際に、具体的な決算額であったりどういった効果があったりといったところについて、御説明させていただき予定でございます。

【会長】

それでは次回、予算の推移なども提示していただきたい。今日は関係委員が欠席であるが、「こどもプロジェクト」の一番に記載されているのが、「芸術士派遣事業」である。これは平成21年度から、市内の保育所等に芸術士と呼ばれる方が派遣されており、子どもたちから感性を伸ばすような芸術教育の取組で、大変、父兄から評判がいい。同時進行で、実施個所を増やしており、平成29年度では、43か所まで増加した。その推移は、資料の中に挙がっている。市長のお話にもあったように、高松市創造都市推進ビジョンの中で一番成果が上がっているのは「こどもプロジェクト」である。そういった意味でも、こういった資料は、関係者だけが分かるものでなく、市民にも説明していくものであった方がいい。その中で、様々な成果が出ているので、客観的な数値を出していただきたい。

【委員】

先ほど、「こどもプロジェクト」の話が出たが、この書類にも記載されている「伝統的ものづくり学校巡回教室」をしており、主に盆栽、庵治石と漆器である。先日、組合長が行っており、テレビでも放映されていたが、子どもたちも普段見る機会からか、目をキラキラさせて見ていたようである。冗談を交えるような雰囲気を作っていくことで、もっと子どもたちにも興味を持ってもらえると思う。また、鬼無小学校では盆栽の教室もやっており、2時間みっちり練習をしている。体験すると故郷が好きになり、文化に触れることで、幅も広がってくると思う。鑑賞も体験もすることが肝だと思う。

盆栽業は秋から冬がハイシーズンで、世界各国から来ていただくが、先日もメキシコから来ていただいて、本当に情熱的で3時間ほど盆栽を見て帰った。テレビで言われているように、非常にデジタル化が進んできており、カード決済も当たり前になってきており、スマートフォンに刺してカードリーダーで読むことをやっているが、そろそろ電子マネーの要求も上がってくるのではないかと危惧している。そのあたりは、商工会議所からでも統一で情報を流していただきたい。カード決済についてもまだまだ追いついてない盆栽屋さんもいる。キャッシュレスは、日本ではまだまだ一般的ではないが、中国では当たり前になっている。そういったことを現場に御指導いただければ、細やかな対応ができるという話である。スマートフォンといかに付き合っていくか対応していくかというところが、現場では重要になってきている。

【会長】

大事な指摘をいただいた。創造都市を考える上で、世界の動きは非常に速いので、情報のネットワークを構築することは重要である。先ほどの点については、経済界と打合せながらやっていただければ良いだろう。

【委員】

色々な立場で県外に行くことがあるが、「どちらから、いらしましたか。」と聞かれることがあり、以前では「四国の香川県です。」と答えただけで話が止まっていたが、最近は「香川のどちらですか。」とまで聞かれ、「高松です。」と答えることが、肌感覚だが多くなっているように感じる。先日も「高松です。」と答えたところ「とてもきれいなところですね。」と言われたところで話が終わってしまったことが、とても残念に思ったところである。まだまだ、都市名が知られていても、それがブランドまでにはなっていないことを感じた。当然、地方都市なので、東京や京都に比べて、あるいは外国人にとっては軽井沢に比べて知名度が低いところもあるのかもしれない。しかし、世界を見渡してみると、地方都市であっても国名よりも都市の名前のほうが先に立っている場所もあるのではないか。是非、これだけのプロジェクトがなされているので、何か良い方法で都市ブランディングがなされていければいいと感じている。

【会長】

これも市長のお話にあったが、瀬戸内国際芸術祭がかなりブランド化されていて、ニューヨークタイムズにも取り上げられている。瀬戸芸の出発点としての高

松など瀬戸芸と高松がセットになってもいいように感じる。様々な切り口があるだろうが、U40に考えてもらってもいいし、広く市民的に提案を求めてもいい。前回のビジョンでは、6つのプロジェクトの中にMICEを入れており、そこから交流という話もしていたが、今回は世界とのつながりということもあるので、シティブランディングと市民のシビックプライドを結びつけるような良い事業を提案いただくといいと思う。

#### 【委員】

前回は申しあげたが、私が気に入っている点は、コンセプトとして「豊かなくらし」が各プロジェクトの真ん中にあり、全てに関係している点である。これを基本にして、色々と取組をしていることはすごく大事な点である。

「地域のことを通して世界的につながる交流へ」という点に関して申しあげると、外国人の目線としては、新しい施設をいろいろ作るというより、地域にある伝統的なもの、既にあるものに惹かれることが多い。最近の新しいものであっても、それをより引き出して、皆に分かってもらおう、充実させようとしている動きが大事である。この「世界につながる交流へ」という部分に関して、何点か思ったこととして、観光客を呼び込むという視点が一つ、もう一つが移住・定住の促進につながる視点の二つの視点を持つ必要がある。

観光客の視点から見れば、高松市のホームページに今日入ってみようとしたら、別のページに飛ばされて、「次のページで、英語が機械翻訳で出ます」と英語が書かれていて、次のページをクリックするとアクセスができない、というようになっている。瀬戸内国際芸術祭に向けて、去年から色々と調べようとしている外国人が多いと思うが、おそらく、高松市のことは全然出てこないと思う。機械翻訳だと、本当に分かりづらい。本当に、海外に向けてアピールしたいなら予算の関係もあると思うが、そのあたりは考えたほうがいい。また、海外に向けたPRは、日本国内向けのPRとは違ってくる。その一つが、できるだけシンプルに書いたほうがいいということ。日本のWebサイトはすごく綺麗で色んなものがあるがそれはそれでいいのだが、英語に直すとごちゃごちゃしてどこに情報があるか分からなくなる。できるだけシンプルに、必要な情報だけを出す努力をすればいいだろう。

先ほど、他の委員からお話が出たが、残念ながら「瀬戸芸＝直島」というイメージが多く、直島に行くには本州から行くというのが多くの外国人の認識。しかし、これは間違っていて、高松から行った方が、泊るところも多い。その認識を変えるためのアピールをどんどんしていく必要がある。

ニューヨークタイムズに大々的に出たことについては、私はむしろ懸念している。瀬戸内海の良さの一つは、ちょっとのんびりした感覚で旅行できることにあり、それで色々な出会いができる。それを保つためには、ある程度制限が必要だと感じている。まだまだ土台ができていないため、一斉に外国人旅行客が入ってきたら、現地の人もパンクして、普段の「おせったいの心」や「もてなしの心」といったものが壊れてしまうのではないか。どうすればいいか分からないが、ちょっと注目されるタイミングが早すぎたと思う。

また、移住になれば話は全く異なってくる。一人の市民として、外国人が高松市に貢献していくためには、どうやれば外国人にとってより暮らしやすくするという話になる。日本人向けの暮らしやすさを作っていくのは、外国人にも反映

される。しかし、日本の制度を理解できないので、彼らへの橋渡しがとても重要になってくる。それにはいろいろなボランティアの力や経験者の力が必要となってくるだろう。

活気あるまちづくりに向けて、色んなプロジェクトがある中で、もちろん瀬戸芸もあるが、まちなかパフォーマンス事業のような取組を通しても、外国人観光客にとって高松の良さを伝えられれば良いと思う。

#### 【事務局】

御意見ありがとうございます。確かに、瀬戸内国際芸術祭と高松市を関連付けて見ていただくことは、本当に必要なことであると私どもも考えております。御心配いただいている限られた予算の中で、瀬戸芸に向けて何ができるのかをこちらでも考えておりまして、瀬戸芸に向けて間に合わすように、観光交流課で所管しております「Experience Takamatsu」という、5言語で発信しております多言語サイトがございまして、こちらに瀬戸内国際芸術祭の窓口を付け、特集記事を組んで、広く高松のことを知っていただくという取組を考えております。現在、作成中でございますので、シンプルに情報を出すことが大事であるという御意見も、反映させていただきながら、良いものを作って会期が終了する11月までにたくさんの方に見ていただけるように取り組んでまいりたいと存じます。御意見どうもありがとうございました。

#### 【委員】

私は高松生まれ高松育ちだが、かつてこんなものが欲しいなと思ったものが、結構今充たされてきている感じはしている。それは多分、色んな分野における努力があるだろうけども、やはりまずはここにいる人たちが、自分たちの生活を充実感をもってやっているのかというのが、一番に来るのではないかと思う。それがどこまでそれぞれの分野でたどり着いているかどうかというところは重要な問題である。

外との関係、つまり、外からどう認知されるかということも非常に大きなポイントではあるのだけれども、まず、ここに住んでいる人たちが、ここまで達成したものについて、「これでいいんだ」という満足感を本当に思っているのかどうか、いつも検証しなければいけないのではないかと考えている。これは否定的な部分ではなくて、かつての生活感覚から行くとこれまで願っていた相当多くの部分が成就されていると私個人的には思っているが、ここからさらにこの地域に住むことがとっても豊かだということが思えること、各分野で重点的に事業は実施しているが全体的に上に上がってきているということを検証しないとダメだと思っはいるが、それをトータルに検証していくところはどこだろうかと常々思っている。それぞれのところでやっはいるのだが、本当にそれが総合的な意味で、こういう面白いふうになっていっているところを確認しているところがどこかにあるのかといつも不安になる。私も第1期からずっとやっはいて、この会議で色んな提案がされていて、そのある意味で反映として色んなことが行われているのだけれども、本当にそれが一つ一つ確認されてやっはっているのか、それか、それを現場でやっはっている人たちがお互いに確認をしあっはっているのかといったことを考えると、もしかしたらもう少し工夫がいるのではないかと思ったりしている。

もう一つ、事務局にお聞きしたいが、資料には、高松市の創造都市としての事業が各部局から出されているが、「もともとやっていたこと」と、「創造都市として新しくやろうとしたこと」と、そのあたりの区分けみたいなものがあるのか。もともとやろうとしたことがここまでに至っているのか、あるいは創造都市としての会議を通して出てきたものが、改善されてここまでに至っているのか。創造都市としてやろうとしたことについては、上手くいっているのか、大分、意見を取り入れたとか、あるいは取り入れてはないが自分たちで提案したものが実を結んでいるとか、そのあたりに区分けみたいなものがどういうふうになっているのかちょっと気になっている。ここで、他の委員の御意見を聴いていると「ああそうだよな」と思いながら聞いていたが、それが実際やったプログラムの中でどこまで反映されて行われているのか、それを誰が検証しているのか、そのシステムみたいなものがどういうふうになっているのか、この段階で聞くのも変かもしれないが、そのあたりをまずは確認をしておきたい。

個人的な感覚からすれば、本当にたくさんのもが行われていて、それで文化芸術の領域でも、瀬戸芸というものもビッグイベントとしてあるわけだけれども、ある意味では、私はエクストラだと思っている。瀬戸芸があることによって、この地域の日々の文化活動や日々の文化芸術と日常の関係とが本当に豊かになってきているのか、どこまで充実しているのかというところが知りたい。それから、それを確認するシステムというのがどういうふうに行われているのか、個人的な悩みでもあるが、そういう部分がもし御意見としてあればお聞かせいただきたい。

#### 【会長】

冒頭に他の委員からも言われたが、7年という期間の中でずっとお付き合いいただいている委員の中には、どこまで達成したか、どこに届いたか確認したいという思いがあることについてはよく分かる。事務局の中でも、第1期から職員が入れ替わってきており、創造都市について引継事項にはなっていると思うが、スタートの時点からどこまで来たかということは、意外に共通認識としては薄いかもしれない。ある時点で7年や10年でどこまで来たということが分かるために、もうちょっとしっかりとした記録なり、アーカイブなりがあってもいいかもしれない。今すぐお答えいただく必要は無いが、例えば次回の会議の中に御意見を反映させる、という形でもいいかもしれない。これは非常にユニークな試みなわけで、高松市役所の組織の中であって試行錯誤の面もあったし、思いがけない成果が生まれたこともあるし、瀬戸芸のような神風が吹いているということもある。そういうものが総体としてどこまで、高松のポジションを上げてきたか、先ほどの話に戻ると「豊かなくらし」をするためにどこまでクオリティが上がってきたかというようなまとめでもいいかもしれない。次回の会議に御報告いただくか、又はしばらく時間をかけて議論してもいい。

#### 【委員】

この資料を読んだときに、先ほどの委員と若干被ることもあると思うが、たくさんの方の事業を取り組まれており、実績などはあるのだろうが、例えば、過去から継続してやっているのであれば、この事業は対象がだれで、どれぐらいの予算で、どれぐらいの期間で、対象になっている人がどう変わったのか、子どもたち

の可能性がどう広がったのか能力が高くなったのか、ということをもっと見える化にしたらどうか。例えば、発信力が弱いだとか改善するところが多々あるという中で、一つ一つの事業をもう少し見える化にしていき、例えば、より良くなったら色が変わるとかにすると、それを市民の人が見ることによって、じゃあ、この事業はすごく良いから、今年は参加してみようというようになってくる。

また、他の委員もおっしゃっていたが、その事業に関わる人や関わる産地の方、関係者の方が実際に継続してやってみて、改善点など、どのように思っているのか、どう変わっているのかということを実際にしっかりと検証していくべきだと思うし、それをもっとちゃんと発信していく必要があるのではないかと。

事業体系の中で「こども」「工芸」「食」「交流」と挙げられており、良いビジョンだと思うが、特に伝統・食の部分に関しては、新しいクリエイティブシティとして新しい取組をするのも大事だが、ここに住んでいる市民の方だったり、新しく移住される方だったり、初めて高松を訪れる方にとって、豊かな高松というのはきっと産業の基盤がしっかりして、伝統工芸がしっかりと未来に向かって守られていくというのが大事だと思う。産業に関わる方々とのこの事業を通してどういうふうに変更されて行っているのかというところをしっかりと検証したうえでもっと取り組んでいかないといけないと思っている。

#### 【委員】

今日の流れの中で、一番に感じた感想だが、このプロジェクトの一覧を見ていて、ここにあるイベントのいくつかは子どもを連れて参加させていただいたが、こういう資料として見ると高松市はすごく多くのイベントに取り組んでいるのだと感じた。実際、自分が子供のころに比べて色々なことに挑戦させていただけるまちであるというようには感じている。

自分が一番関わっているところとしては、「学校巡回芸術教室」においてここ何年も御世話になっているが、ここに数値として出ているように年々数が減っている。学校からの依頼自体がここ最近減っており、洋楽の依頼が少しはあるが、邦楽の依頼、民謡などに至っては全くなくて寂しいと思っている。実際に、「学校巡回芸術教室」に行くと、皆さんやってみただとか、子どもも聞いてよかったとか実際に体験してみただとかいう意見があり感触は良いが、そこで止まってしまう。やってみたいと思う、じゃあ次何をすればいいのか、そこから御稽古に習いに行くというような発想が出てこない。せっかく興味をもってやりたいというお子さんなり親御さんなりがいるので、そこをもう一つ踏み入れて、実際に楽器などに触れてそこから継続してやってほしいと願っている。英会話とかだと、3歳だとかに脳ができてくるので英語のシャワーを浴びなさいということがあがると思うが、高松市の場合は、そういう芸術の感性を浴びさせていただけると思われるので、そこからそれを浴びて、そこから発信できるような動きになっていければ良いと思う。

#### 【委員】

私は、専門の美術の面からしかお話しできないと思うが、瀬戸内国際芸術祭のことが先ほどから頻繁に出てきているが、瀬戸芸は3年に1回ということで、間の2年間があるわけだが、この間の2年間においても様々なプログラムが行われていたりするし、その2年間の間に高松には、資料4にも書かれているだけの



様々なことが行われている。そういったことが、上手く色んな形で発信していけるような形が望ましいだろうし、瀬戸芸に皆さんがいらっしゃってもそういった場面によく出くわされるのではないかと思うが、絵画とか彫刻のようなモノとしての美術作品だけでなく出来事、モノからコトへというか、そういったことにとんどんアートについても、表現の形が変わっていつている部分もある。そしてここでは、こういう「交流」というところの真ん中にある「豊かなくらし」の周囲に「こども」「工芸」「食」とあるわけだが、芸術文化というものによって横串を刺して様々なことに展開していくということなので、3年ぐらい前だったか、高松市内でメディアアートの祭典が年末に行われていたかと思う。非常に市内の色んな場所でやられていて、商店街の中では体をフィジカルに動かして、走った軌跡が映像になって映り、速さを競うような形になっている。そういうメディアアート作品なんかも、多くの市民の方たちが体験されていたりということで、そういったところからこれだけ文化芸術振興課の所管の取組もあるとのことなので、今までバラバラにやられていることに横串を刺しながら、「こども」「工芸」「食」というところにつないでいくような、点がバラバラとあるのではなくて、全部を面のように、高松市にはこんなに色んなことがなされているんだということが伝わっていくような形で進めていただきたい。簡単なことではないと思う。色んな都市で、それこそ京都なんかであっても、美術の人は美術しか見なくてパフォーマンスを見ないとか、音楽とかそういったそれぞれの分野でこうある種の島という感じで村化しているようなところもあるわけだが、そこを横串を刺していけるような場所として、高松がプラットフォームになっていけるといいのではないか。あるいは、高松空港には今国際線なんかも飛んでいて、直接いらっしゃる方なんかも非常に多いと思うし、瀬戸芸の話でいうと福武財団のお手伝いをさせていただいているが、最近、データで出てきたのは、インターンというかボランティアでサポーターで来てくれる人たちの中で、東アジアから来てくれる人が、日本だけじゃなく中国・韓国もそうだけれども、それ以外の東アジア方面からも若いサポーターが非常に多く来ている。そういう人たちに研修の機会というようなことでも福武財団のサポートというのがあるが、そういった方たちが来られるような機会に、高松についても何か知っていただくような機会を持つとか、ここを大体の方たちが経由されるので、そういった若い、非常に発信力もある、非常に意欲のある人たちに、この地域の様々なこと、特に高松市美術館なんかは本当にコレクションも素晴らしいし、そういったことなんかも上手く伝わっていくような、そういった色んなプログラムが一面になっていくような方向性を考えていただければと高松ブランドとして強くアピールできるのではないかと考えている。

【会長】

只今、いただいた様々な御意見について、事務局から何かあればお願いしたい。

【事務局】

創造都市という局を作って、ビジョンを作って、どういう変化があったのかというお話があったわけですが、それに対してお答えさせていただきます。前回のビジョン策定の際に、一番苦慮したのは職員です。ビジョンを作って

職員に説明して、それを分かってくれる職員を育てていかないといけないというところが、苦労したところでございます。なぜかという、それぞれ担当の仕事をするというところが、まず、第一義にあるわけです。このビジョンを作った目的というのは、そういったそれぞれの課にございます根拠法令や条例などに横串を刺すということにありました。要は、こういった縦割りの事業や仕事とか、いかに課なり係なりあるところにいかに垣根を超えるか、連携をさせて仕事をするようにさせるか、ということに最初の2・3年苦慮したのを覚えております。そんな中で、先ほどU40の話もありましたけども、自分のことをまず一義に考えながらも、そういった周りの景色も見つつ、あれとこれとを連携してできないかとか、一緒にすることで人が少なくて済むとか、そういった発想がだんだんと職員の中に生まれてくるようになったのが一つ確かなことだと考えております。その象徴たるものが去年の日本パラ陸上だと考えております。これは障がい福祉課・スポーツ振興課といったところが主体となって、屋島レクザムフィールドで実施したのですが、嬉しかったこととして、ものすごく大きな企業が支援・参画していただきましたし、あともう一つ象徴的なこととして、パラアスリートが小学校に行って、選手としての苦労話であるとか、フリートークであるとか、実際に車椅子を組み立てるところから子どもたちに見せて、そういったことを去年やったわけです。これもまさにできる限り垣根を超えた、市役所内もそうですが、民間企業との垣根、行政の市・県・国の垣根、そういう共同作業というものが、徐々に、職員の中にも意識して行うようになって来たというのは、一歩前進じゃないかと思えます。

行政的に話しますと、こういうものをして、どういった成果が上がっていったかという、必ず目標値が定めさせられてその目標に向かって数を拾って、事業を測ろうとするわけですけども、そういったものも一つの方策であるかもしれませんが、少なくとも先ほどからたくさんいただいている意見を私どもも、もう少し整理させていただいて、会長がおっしゃられるように、次回に、皆様方が分かるようにこういった成果を上げております、といったことを一つ一つできるところからやっていきたいと思っております。すぐは、なかなかできないかもしれませんが、見える化という話もありましたが、それについては、私ども市の職員にも、ちゃんと見せていかないそれが仕事に結びついていかないのではないかと思います。ただ、ここにいるメンバーだけがそれを意識して仕事をして長続きもしませんし、そういった面持ちでこれからもやっていきたいと思えます。審議会委員の皆様にも御協力をお願いしたいと思います。

#### 【副会長】

先ほどのカード決済の件については、商工会議所の方にて検討させていただく。皆さんから成果という話が出ていたが、もう一つ踏み込んで成果がこれだけ出たのかということやジャッジすると同時に、どれだけ希望者があったのか、この事業に対してどれだけの希望者があって予算の関係もあるがこれだけの結果になったと、そういうことをもう一文書いていただくと、どの事業が一番人気があるというか、市民が望んでいるかというのがよく分かる。せっかく、「実施実績」と書いていただけるのなら、もう一つ、希望がどれくらいあり、そのうちこれだけしかできなかったということやぜひ書いていただきたい。あとは、皆さんがおっしゃっていただいたため、付け加えることはないが、一つ市にお願いがあ

る。次の議題の話になるが、この会議は今日を含めて、任期中4回しかない。せっかく、これだけ素晴らしいメンバーが集まっているのに、4回では一人5分程度しかしゃべることができない。それでは、あまりにもったいないという気がしている。皆さん、当然ながらメールだとかSNSとか利用されていると思うので、それを利用して、掲示板のような形で皆の意見のある程度随時出せるような、次の会議が7月か8月頃なら、会議の前に資料をいただき、それに対して皆がどんな意見を出して、他の委員に対して意見を言ったり、パソコンの上でも討論の場を設ければ、よりこの会議が深くなる。4回では、あまりにもったいない。あまり予算もかからないと思うので、その辺をぜひ考えていただきたい。

私からは以上ですが、一つPRさせていただくと、今度の瀬戸内国際芸術祭が4月26日からだが、4月28日にクルーザーを集めてレースをする。高松のサンポートからしっかりとスタートラインが見える。そこには全部で3回帰ってくる。もし、お時間がありましたら、見ていただければ幸いです。

#### 【会長】

皆さんから色々と御意見いただいたが、次回以降の会議の在り方についてや本日、欠席の委員からも分科会方式をとってはどうかという意見もある。回数を増やすことも一つだが、時間を少しゆったり取って開催する。前からお話ししているが、本審議会を引き受けているときから、できる限りクリエイティブな場所で議論させてほしいということを書いていたので、あちこち本当に苦労して場所を探してもらいました。どうしようもないときは市役所になるが、少しリラックスして色んな話ができるそういう会が次回か次々回ぐらいにあってもいいかもしれない。さすがに合宿をするという話ではないが、ある程度長めにとって市長さんの日程も調整されて市長の御意見も交えて、そういうふうなものがあるとちょっと深くなった議論ができる。メンバーは本当に色んな分野から来てもらっているので、経験も積んできたので、そういった方向にぜひ考えていただければいい。

#### 【委員】

確かに持ち時間を計算していると、一つぐらいしかしゃべれないと思っていたので、このままでは、消化不良のまま帰るような気がしている。先ほどの話のように、どこかへの書き込みなのか、一方通行のメールではなくて、投げかけができるような機会を作ってください、忘れないうちに議論が熱いうちに意見を出しておきたい。

#### 【委員】

事務方の段取りがあると思うが、もしよければもう一周、話がしたいと思っている。

#### 【会長】

今日は既に予定された時間があるので、次回以降の課題として考えていただきたい。

議題（2）今後の予定について

(事務局から配付資料について説明)

【会長】

早速だが、次回の7月・8月頃の会議について御意見をいただいているので、事務局で工夫をしていただくようお願いしたい。

【委員】

以前に紹介させていただいたが、高松は海城町というところで、世界で唯一の構造を持っている。海があって、城があって、まちがある。あれだけ均整の取れたまちというのは世界で唯一という話をさせていただき、ようやく昨年度日本中の近世城下町の絵図を収集し、色々と判明してきたことがある。海城という言葉自体は、日本の城郭研究家の間でも明確な定義はないが、調べたところ、城郭が直接海に面している城は日本で24城あり、それも西日本にしかないことが分かった。瀬戸内海でいうと13城ある。高松のような海があって、城があって、まちがあるという構造は9城ある。その中で、海・城・まちの均整の取れたまちは、唯一、高松だけだったということがデータを元に明らかになった。なぜ、高松だけなのかというところが、どうやら、香東川の架け替えが重要な地理的要素を持っているということも分かってきた。こういうことも高松のシティプロモーションに、非常に重要だと個人的に思っている。良ければ、次回、10分程度御時間をいただければ、掻い摘んでお話しさせていただきたい。かなり、重要なお城のあるまちであり、城の復元に向けて10万人の署名も集まり、徐々に盛り上がってきているので、非常に重要な部分なのでもしよければお話を聞いていただければと思う。

【会長】

先ほどからの会議の進め方に関わるが、おそらく他の委員としても、自分もプレゼンがしたいので時間が欲しい、ということがあると思う。それを少し整理して、全員が15分も使えないので、3分の1ずつ話すなどという方向もあるなと思う。次回からの会議の進め方については、これまでと違うものを考えていただきたい。

本日の会議については、ここでいったん閉会させていただき、御時間の余裕のある方については、本会場の視察に参加いただくということによろしいか。

(異議なし)

5 閉会